くの先行研究があるジャワ（著者もフィールドとする）やバリに加え，とりわけマレーシア対決で戦略的地域となった西カリマンタンにおけるPKI排除を扱っているものの，スマトラ島では主に華人のみを扱い，他の地域には触れられていないという地域的偏りが指摘されよう。ジャワ内部における地域ごとの社会構造の差異が捨象されているきらいもあり，特に農地改革後，共産勢力が仕掛け，農村における対立を激化させたとされる一方的行動（小作人が一方的・暴力的に農地解放を行なった）については，社会構造の差異からその内実と共に地域的偏差が十分に予想される。イスラム勢力の虐殺への関与については，末端における血腥いジハードは描かれたが，ナフダトゥル・ウラマなどのイスラム組織やその傘下組織がどのように陸軍と繋がり，虐殺に関与したかは明らかにされていない。また，国際関係においてはアメリカだけではなく，マレーシア対決で直接利害のあったイギリスへの目配りが十分とは思えない。

上記の指摘は，しかしながら，著者あるいは本書のみに向けられるべきものではない。本書は，9月30日事件に関する研究に新たな知見を加えつつ，9月30日事件を巡る政治変動の全体像を提示しようとしており，そうすることで著者や評者を含めた研究者に対して今後の課題を明確にした道標となっている。

（高地　薫・大東文化大学・非常勤講師）

北村由美.『インドネシア　創られゆく華人文化――民主化以降の表象をめぐって』明石書店，2014，260p.

本書の対象は，インドネシア華人，すなわち「自らの出自を中国系であると認識した上で，インドネシアを出身地と考えている人々」（p.33）と，その文化表象である。著者の北村由美がジャカルタで現地調査を始めたのが2003年であり，その眼前で展開される民主化以降の華人をめぐる様々な変化が，本書の主対象となっている，それらの変化の意味を，植民地期からの歴史的・社会的文脈，そして時にはマレーシアやフィリピンなど他国の華人コミュニティとの比較の視野の中において明らかにしていく形となっている。

本書のもととなった一連の研究の調査時期は，スハルト体制が崩壊した後の極めて流動的でダイナミックな時期である。約30年間のスハルト体制期を通じて，「同化主義」の名の下に「華人性」を表現する活動や表象が段階的に禁じられていく一方で，多様な華人を「チナ」として集合的に他者化する枠組みは強固に持続した。同化主義に華人の側がどれほど順応しても，「チナはチナ」として集合的に差別された。民主化後のジャカルタとは，こうした差別の締めくくりとも言うべき1998年5月の大々的な反華暴動の後を意味する。首都のただ中での暴力の氾濫は，そのターゲットとなった華人と，信用失墜したスハルト政権と自らとを差別化したい新政権双方にとって，対華人政策や，それを所与とした生き方への再検討をつきつけた。ここに国民文化の中に華人文化をいかに位置づけるかが，改めて問われることとなったのである。本書の目的とは，そうした時代状況の中で「これまで自己表象という自らの『物語』を禁じられていた華人が，ようやく語り始めた『物語』が創られる過程とそれに対応する国家側の動向を描くこと」（p.11）である。

全体は序と1章から6章，そして終章から成り立っている。章立てと章のタイトルは，以下の通りである。

1章：インドネシアの国民文化の形成と華人
2章：インドネシアにおける華人の歴史
3章：言語――ジャカルタの言語景観にみられる中国語使用と変化のきざし
4章：宗教――儒教の再公認化と華人
5章：表象――華人文化表象の場としての印華文化公園
6章：華人文化表象のもうひとつの方向性――プラナカン概念の再浮上

一見して明らかな通り，1章と2章は序説的な部分で，ポスト・スハルト期のインドネシアにおける華人を論じるための制度的／歴史的な文脈を読者に提供する部分である。1章ではインドネシア独立以降，スカルノ体制からスハルト体制期におけるインドネシアで，文化と国民性に関する基本

的な視点や政策・制度がどのように創られ変化していったか，またそうした公式の国民文化への見方に対し，華人やその文化がどのように位置づけられてきたのかを，先行研究に拠りつつコンパクトにまとめている。2章は，インドネシアにおける華人の歴史を，やはり先行研究に拠りつつ前植民地時代からスハルト体制崩壊まで駆け足で紹介している。

本書の中心的部分をなすのは3章から6章である。3章では主に華人街の店舗看板を中心とした都市景観の中の言語（言語景観），4章では儒教の位置づけ，とりわけ「宗教」としての地位の獲得や喪失をめぐる変遷，5章ではインドネシアの国民統合と地方文化をテーマとしたテーマパーク「タマン・ミニ」における華人文化紹介のための区画（印華文化公園）の建築デザイン，6章では高級なカタログ書籍（プラナカン文化を主題としたコーヒー・テーブル・ブック）である。これらは2009年から2012年にかけて別個に発表された論文を下敷きにしており別々の対象に焦点を当てているが，そこに通底する問題関心の一貫性は一読して明らかである。

著者は序章で，「ナショナリズムやアイデンティティと呼ばれるさまざまな位相における帰属意識を表現する感情や論理を，それらの用語に頼らず，なんとか理解したいという思いがあった」（p. 10）と述べている。そのために戦術的な焦点として著者が選んだのが，看板，建築，書籍といった具体的なモノ，都市空間の中で視角的に確認できる変化であった。取り上げられた対象は様々であるが，いずれの場合も共通しているのは，それらが「華人性」や「中国文化」との関連で，スハルト体制期に公的空間から排除され，不可視化または周辺化された事象と関連している点であり，それゆえにそれが民主化後に出現し，あるいは変化することが，創成の渦中にある「華人性」の一環をなしている点である。

これらの対象そのものは，いずれも比較的人目を惹くものであり，その意味で初発の着眼点としては特にユニークとは言えないかもしれない。しかし著者はそれらの背後にある主要なアクターを探りだし，地道な聞き取りを行っていく。例えばグロドックの漢方薬局の看板の背後に中医の認証団体である印尼中医協会，春節の祝賀行事の背後に儒教最高評議会，印華文化公園の背後に印華百華姓協会，そしてプラナカンを扱うコーヒー・テーブル・ブックの背後に，インドネシア・クロスカルチャー協会といった具合である。これらの団体を中心とした関係者への聞き取りを重ねることで，華人表象の生み手となる組織の歴史，内実，動機や論理，そして関係する諸アクター（競合団体や政府，スポンサーとなる大手企業家 etc.）との関係のダイナミズムを明るみに出している。ここが本書の非常に興味深い部分である。

例えば3章では，スハルト体制期における中医の育成・教育の国家的制度化に関する，一般にほとんど知られていない歴史が語られる。また4章では，植民地時代からの儒教の位置づけの変遷が語られるが，北村はスハルト体制への転換直後の1960年代後半から1970年代初頭にかけて，「中国的」とされる言語や習慣が次々と禁止・制限されていった一方，儒教はむしろ教勢を拡大したことを指摘している。スカルノ時代に儒教は共産主義（＝無宗教）とは対照的な「宗教」としての地位を獲得しており，国内の儒教信徒の傘組織である儒教最高評議会は，ゴルカルの選挙運動に協力するなど，新政権の安定化に協力していたからである。この点の指摘は，スハルト期政権の「儒教」への取り扱いを同化政策の一例として早急に一般化せず，時期区分をしつつ変化の個別的原因を丁寧に追及すべきという問題提起ともなっている。6章では一見似たような体裁・発想で作られたインドネシア，マレーシア，フィリピンの4冊のコーヒー・テーブル・ブックの内容を丁寧に比較し，内容の違いの背後に，それぞれの国の華人コミュニティの置かれた状況の違いを読み取っている。

民主化後に創られた華人性をめぐる様々な表象の検討から明らかにされるのは，それらに大陸中国を基準とした形の文化本質主義が強く見られることである。例えば，タマン・ミニの一角に建設された印華文化公園は廈門の設計事務所がデザインを担当し，紫禁城のミニチュア，清朝時代の陵墓群の門を想起させる門など，「華人＝中国＝北京という，極端に単純化された構図」（p. 159）に基

づいたデザインとなった。また，儒教信徒はインドネシアでは0.1%しかいないにもかかわらず，民主化後政府は儒教にイスラーム教，キリスト教や仏教，ヒンドゥー教とならぶ公認宗教としての地位を回復させ，春節（中国正月）は国民の祝日とされ，インドネシア儒教最高評議会が宗教行事として主催する春節の祝賀儀礼には大統領を筆頭に政府要人が出席し，華人に差別的な法制の撤回など華人の地位向上に向けた政策の進展ぶりをアピールするようになった（p.131）。

著者はこうした傾向が顕著となった背後に，スハルト体制期の論理の強い拘束性を見ている。スハルト体制期，政府は中国的な文化や伝統を連想させるものを禁止の対象とした。ポスト・スハルト期の華人表象はいわばネガのポジへの反転であり，スハルト期に禁止・抑圧された要素が，華人が自らの権利や自由を再主張する際にも，政府がスハルト体制との断絶をアピール際にも，価値のある資源として積極的に利用されたのである。

他方で著者はこうした中国文化志向の興隆をあくまで民主化後の一時期に顕著となった現象であり，華人社会内部の多様性と民主化後の自由な状況は，それと競合し，相対化させる多様な表象を生み出して行くだろうとも予想している。「華人＝中国＝北京」的な表象は現実の華人の生活とは乖離しており，多くの華人にとって違和感や懸念の対象ともなってきたからである。6章で光を当てられるプラナカン文化の再評価は，華人性を表象するにあたって，むしろインドネシアでの多様な文化との混交から生まれた生活様式の遺産を評価していこうというオルタナティヴな志向性の一例である。

また，終章ではこれらの表象が経済成長と消費ブームに湧く都市の中間層の間で，中国語コースや中華料理，結婚式ビジネスやプラナカン・レストランなどの形で商品化され，消費されていく傾向も指摘されている。また華人のバスキ・チャハヤ・プルナマ（アホック）がジャカルタの知事に就任したことが象徴するように，文化表象が消費財化する一方で，実際の華人はますます多彩な領域で活発に活動するようになっている。

経済成長の中で，華人／非華人に関係なく似たような都市環境の中で生活し，類似のライフスタイルをもった中間層が厚みをもつこと，民主化が定着し政情が安定する中で，華人／非華人の別なく多様な自己表現ができること，こうした条件があと10年程度続けば，華人／非華人という区別はインドネシアそのものの多様性の中の一項として相対化され，「華人研究」という枠組みそのものが時代錯誤になる日が来るかもしれない……北村はそうした明るい見通しを提起して，本書を締めくくっている。

アホックのジャカルタ知事としての活躍が例示するように，現在の華人の社会的地位の改善はスハルト期に比べると隔世の感を与えるもので，評者も北村の希望的シナリオが実現することを心から望む一人である。このシナリオの実現可能性を測る際，大きな要素の一つとなると思われるのが，本書で触れられなかった華人キリスト教徒の増加と華人性表象との関係である。本書が取り上げたジャカルタは，華人住民の多さから，キリスト教徒人口における華人の存在感が非常に大きな場所である。「プラナカン」と「トトック」という用語にひきつけて言えば，オランダ植民地期にせよスハルト体制期にしろ，キリスト教への改宗は，儒教に華人性の拠り所をもとめる立場よりもプラナカン的であったと言える。しかし，プラナカン的であることは，華人をめぐる状況の解決を意味しない。評者としては1998年5月の反華暴動の際，襲撃の火の粉を浴びたくない非華人の店舗や家が一斉に壁に書き付けたのが“Milik Pribumi”（「プリブミの所有物」）の文字とならんで“Milik Muslim”（「ムスリムの所有物」）であり，また家々の塀に掲げられたのがイスラームの礼拝マットであったことを忘れることができない。スハルト体制期にキリスト教に改宗する華人が増えた過程は，「プリブミVSチナ」という問題系が「ムスリムVSクリスチャン」という別の問題系と上重ねされ，再翻訳された歴史でもあったのではなかろうか。

民主化後，富豪を含む熱心な華人信者の潤沢な資金力を裏付けに，首都ジャカルタでは巨大なメガ・チャーチまで建設されるようになった。他方，マジョリティであるムスリムのイスラーム化も，深化する一方である。今後，社会秩序や世論を惹

き付ける諸争点は，どの程度までムスリム―クリスチャン間の社会的亀裂を顕在化させる形で形成されるのか，またそれは華人性とどう関連づけられ，あるいはつけられないのか……著者の示唆した希望的シナリオは，こうした点にも大きく左右されるように思われる。そしてその帰趨は，本書が分析したような華人コミュニティとインドネシア政府との関係に加え，見市建が近著（『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』）で分析したような，ムスリム・マジョリティ内の諸アクターの動向に大きな影響を受けるだろう。また，インドネシア華人の運命が遠く離れた中国大陸での政治情勢やインドネシア―中国間の外交関係によって何度も翻弄されたように，今日のジャカルタのムスリム多数派とキリスト教徒華人との関係性も，イスラーム教とキリスト教をめぐる世界各地での様々な政治情勢によって影響を受けざるを得ない。

こうした論点は，インドネシア華人の将来の安全や幸福にとっても，首都圏の将来的な繁栄にとっても，切実な論点と言える。本書が，今後日本でジャカルタの華人について知り，考える上で必ず参照される基本文献となるにふさわしい間口の広さ，簡潔さと文章の平明さ，専門性を兼ね備えているだけに，個人的には儒教以外の宗教と華人性との関わりについても，もう一章加えて深く論じて欲しかったという思いはある。しかし天に唾はしないもので，こうした「宿題」の指摘は，同じ首都圏を研究している評者にも即跳ね返ってきてしまう。紙幅の都合上これ以上挙げないが，評者にとって本書は今後インドネシアの華人についてさらに考え，論及していくための示唆に満ちており，様々な論点を想起させ，さらなる研究を誘いかける招きの本でもあった。これから本書を手に取る他の多くの読者にとっても，そうであることを願いたい。

（新井健一郎・共愛学園前橋国際大学）

リチャード T. コーレット（著），長田典之；松林尚志；沼田真也；安田雅俊（共訳）．『アジアの熱帯生態学』東海大学出版会，2013，xii+276p.

本書は，リチャード T. コーレット氏（中国科学院西双版納熱帯植物園・教授）により2009年にOxford University Pressから上梓された *The Ecology of Tropical East Asia* の訳書である。本書は熱帯東アジア（耳慣れない単語であるが，定義は以下を参照のこと）の陸上生態学の全体像について広く説明しようとするものであるが，生態学のみならず，本地域の環境史，自然地理学，生物地理学から始まり，環境問題にも焦点を当てており，通して読むと本地域の自然環境について，その成り立ちから現在の問題までを一通り押さえることができる内容となっている。著者は生態学者である一方で，ATBC（Association for Tropical Biology and Conservation，熱帯生物学・保全連合）の会長を務め，IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change，気候変動に関する政府間パネル）の第5次（2014年）評価報告書第2作業部会において活躍しており，熱帯林における生態学の純粋な学問的面白さを追求するだけではなく，熱帯林をどのように保護し，再生していくのかといったことに対する強い関心が，本書の内容の隅々から感じ取れる。熱帯東アジア地域の研究をこれから行おうとする初学者，また，特定の地域やトピックについて既に深い知見を持っているが，広く本地域について知りたい方にもお奨めしたい本である。

本書は全10章からなる。1～3章はそれぞれ，環境史，自然地理学，生物地理学に焦点をあて，熱帯東アジアの自然についての概観を説明している。

1章の「環境史」では，本書で扱う「熱帯東アジア（Tropical East Asia）」についての定義が示されている。熱帯東アジアとは，アジアの熱帯・亜熱帯の東半分である，ミャンマー，ラオス，カンボジア，ベトナム，タイ，マレーシア，シンガポール，ブルネイ，フィリピン，インドネシア西部，北緯30度までの中国南部，日本の琉球（南西）諸島，インドのアンダマン諸島およびニコバル諸島から